



目次

- ▲論説
師走の労働社會
- ▲文苑
秋の北國よ
秋の夕
雑吟
露の日
- ▲雑報
學校便り
校友會便り
會員消息
其他
- ▲附録
會員名簿

大正五年十二月五日 第八拾六號 每五期(日)行刊(明)治四十四年六月十四日(可認物便郵種三第)

論説

師走の労働社會へ

岩田生

▲冬が来た、凋落の冬が、山も、河も、草も、木も、さては天空までも、あの生き生きとした輪廓を隠して今は哀愁に沈んで来た、けれども休暇が迫つた、正月が近づいた、斯う思う毎に今まで吾が胸を閉して居つた凋落の悲愁は忽ち立ち消えて楽しい冬休みや希望に充ちた正月の行樂が胸に溢れる、さても歸省や正月を楽しく待たるゝ僕等の幸福さよ、

然るに、然るに僕等にとつて此楽しい待ち遠しい師走といふ月は、一年を通じて犯罪と自殺の最も多い月だと聞いて僕はそれが何のためであらうといふ疑念よりも、先づ細き煙に慘憺たる生活を營みつゝある彼の労働者の上を思ふた、それはその惨事の原因が當然生活難にあると直感したからである。

▲正月といへば餅、卑い僕の頭には一番先きに浮んで来るものはこれである、餅といへば、昨年或る市の新聞社が発起となつて正月の餅米を讀者から募集してそれを社で搗いて、餅の搗けない貧民に頒ち與へて大いに彼等を賑はしたといふ美しい話を記

憶して居る、貧民共はどんなに感謝に満ちた正月を迎へたであらう、どんなにねばりけの強い正月を迎へることが出来たことであらう、

又僕は三四年ばかり以前にこんな記事を新聞で見た、それは丁度師走の末の或夜、或野中の水車小屋の白に入れて搗かれつゝあつた玄米を一白掬ひ上げて持ち出した者があつた、それから二三日経つて此の里から遠く離れた穀屋へ稾の玄米を持つて糯米と交換に來た者があつた、その玄米が半搗けであつた事から水車小屋の犯人は其の者であると知れてすぐ囚へられた、それは確かな女であつたと記憶して居る、

▲餅のない正月、彼の女にはこうした正月は眞の正月ではなかつた、否彼の女ばかりではない、殊に労働社會や小供等の正月は物質的の正月である、餅や屠蘇に由らなければ眞の正月は味はれない、其の随一である餅を人から恵まれねば、盗まねば正月が出来ぬとはこれ以上の悲惨事が又とあらうか、此の記事は三面の一隅に小さい活字で掲げられてあつた、けれども僕にはこれが爾く些細な問題とは考へられなかつた、そして今でも僕は正月と言ふと餅を思ふと共に餅に就いて時々此の二つの話を連想する、

▲餅が搗けぬ爲めに盗みをしたり、債鬼に責めらるゝの辛さ淺はかな考を起す人々が

さて師走の此頃は、これほど多事であらう、それが怠惰や放蕩に對する當然の制裁であつたならば、自業自得の社會を擾亂する憎みても餘りある奴だ、けれども彼等の多くは決してさうではない、食ふものも碌に食はずに其の日の悲慘な汗で明し暮して來た眞面目な勞働者に、尊る多き事を思ふて、僕は一層彼等の境遇に涙なきを得ない、されば彼等がかかる苦境に沈めたのは、彼等自身でなくて、他に斯くせしめた原因がなければならぬ

▲粉になるまで使ひ果したその身を息ふべき年の瀬は、彼等にとつては休息の峠ではなくて、債鬼の群る關所である、うれでも彼等は何等の不平不満も言はずに濟まざるか、その眞面を以て終始一貫する氣になれやうか、再びの疲憊した身體に鞭打つ元氣が生じやうか、玉樓の裡に安逸を貪る所謂富豪なるもの、暢氣な生活を眺めた彼等の頭の中に、一種異様の感がむらむらと涌かすに止まらうか、何時までも資本家の横暴に屈從し得やうか、何時までも彼等の痼癩玉は破裂せず居るであらうか、僕は斯う考へると實に戰慄せずには居られない

我が國の彼等の社會も漸く目醒めて來た、彼等は事業家との温き主従關係の舊慣から脱れやうとして來た、それはその温かさが次第に冷却したからである、企業家の横暴に對する不平の聲は工場法を生んだ、今や企業家は其の聲に目醒めねばならぬ、彼等の境遇に同情してその生活をして安定にせしめねばならぬ、奴隷視した目を離へして今少しく尊重せねばならぬ

▲蓋し之等動的の沈黙は決して長く續くものではない、現に歐米の彼等の社會には頻々としてこの痼癩玉は破裂して居るではないか、善い現象か悪い現象かは知らないが、

があらう、僕等の多くは將に其の責任ある問題に逢着せんとして居る、よい機会だ、僕等は彼等を悲慘な境遇から救ひ出さんが爲めに、否、出やうが爲めに一肌脱がねばならぬ

所謂「岐蘇林友改革論」を批評し、進んで問題に對する私見を述べ

從來岐蘇林友に就て、いはゆる「岐蘇林友改革論」とでも言ふ様な問題に就ての意見は、一二誌中に見られた様だが、あまり會員諸君の間に注意を惹くことなく従つて論せられなかつた、然るに八月號から三ヶ月連續して丸山君が之れに對する意見を大論文を以て公表されてから俄然として大問題となり、會員諸君の注意と感興を惹起し先月號には大分熱烈に論せられたやうだ、尤も斯ういふ意見や希望はすつと前から林友を愛する人々の頭にはあつたであらうが、それ等の意見や要求を纏めて公表されたのは、實に丸山君であると思ふ、僕は之れに對して林友の爲否校友の爲に時間と根氣を惜まずあつたやうな長論文を誌上に發表したのは事を切に感謝する次第である、僕には本問題に就いて論する資格はないが、ただ何となき會員の一人として校友會の爲に鳴

許がましくも愚見を發表して幾分なりと裨益する所があれば幸であり且つは林友當局者の勞を謝するの餘り書いたのではなく自然に書いたのである、それ故或は借上の驕りもあらう或は問題熱に浮されたとの笑もあらう、或は僕の意見に對する批難もあらうが僕はこれ等のものを顧みずに書きちらした、どうか之れも貧弱だが校友に對する一片の至情であるとして御一讀を乞ふ次第である

扱て、所謂「岐蘇林友改革論」の批評などと言へば如何にも麗々しく又大袈裟で大論題のやうに聞けるがこの論の實質は從來會員諸君に依て論せられて來た本問題に就ての私評に過ぎない、で諸君の眞面目な論旨をむやみに批評などしては都合だ借越だとの怒りは素より覺悟をして居るけれども僕としては、岐蘇林友を現在よりより以上の價値を生せしめ且つその眞價を認めらるゝやうにするについては如何うしたならばよいかといふ問題を研究するに當つて先づ順序として是非なく前に發表された諸君の議論を參考として研究する必要があるのだから豫めた断りを次第である、僕はずつと以前の事は知らないが、この二三年間に於て本問題に就ての意見や希望を誌上に公表されたものに大略次の如きものがあらうと思ふ、(或はこれ以外に他の文に

附隨して述べられたのもあらうが) には省略する) 即ち昨年十二月號に丸山坊君の「御即位の大典を記念し林友の改善を望む」感録、同八月號より十二月號までの、丸山君の「岐蘇林友を如何にすべきや」さてこれより前述の通り之等の諸君の論説を愚評する事とし先づ順序として、丸山坊君の「御即位……」よりはじめ順次後の兩君に及ばし最後に私見を述べることとする、丸山坊君の論説に就ては僕は或一部分はマダキは改善の要點として四項を挙げられたが、僕は之はあまりに形式に走り過ぎて一後に僕が叙べやうが、より以上の大切な點を開却されて居られるのではあるまいかと思ふ

而も其中の第一項は到底現在の吾が校友會の状態では實現が困難、今年の豫算會の状態を見れば明である、けれども困難だからと言つて捨てるべきではない僕等校友は擧つて斯くすべく努めねばならぬ、そして會友の心掛け一つでこれもさまで困難であるまい、僕等は理想として同感だ第二の表紙改良の云々に付いての實行は困難であるまい、そして蘇峽を偲ぶやうな意義ある表紙に改めたら林友を手にした時の心持は良からう、しかし現在の表紙も決して意義の無いものではないと思ふ、一昨年の六月までのものと較べて見れば當時の部

員諸君が之れを改めるに就いて苦心せられた跡があり、と見て居る

次に、マダキ遷史の「林友誌寸感録」に就てであるが、大体に於て僕は君の説に賛成するも強ひて言へばあまりその現在の林友に對して價値を認められない事である、先輩諸君に對する要求は私が常に望む所と一致して痛快に感ずた

て一般會友諸兄にもこうした愛情が吾が林友誌上に否校友會に注いでいたやきたい、そうすれば林友はもう期せずして改革される事と信する、そして論文に就ては僕の頭には批評の餘地がないが、君もあまり林友の現状を悲觀し過ぎて居らるゝのではなからうか

以上で不徹底ながら貴い諸君の論説について所感を述べた次第であるが、重ねて安評を謝し次いで僕の本問題に對する愚見を述べて見る、固より諸君の論説に對して屋上屋の思もある、或は偏見もある、或は理想に走り過ぎてゐる事もある、而も諸君の論は、僕が左に述べる意見の好個の土臺である、僕は煩を避けるため簡條書にして見る、

勢ひ似而非文士の遊場となり、部校友の獨占場となるは止むを得ざるなり、此意義に於て原稿の雨下を渴望す、(以上)

秋雨の夕

柏村生

々したあの安曇野に漂うて居る、あゝ其後母の病氣の様子は如何だらうか思はず涙ぐんだ
雨は急に降り出し雨樋の音さへ烈しく青白い月光は燦々として夜の命は輝き初めた
(日記の中より)

和歌

秋の北國より

華村生

山葡萄の紫に色づいて
熊住む蝦夷に秋は来れり
人もなき田舎の驛に一人立ち
くれゆく秋の淋しみを聞く
晩秋の月照る蝦夷の宿にして
黒髪集を吾は見てあり
秋の夜に一人歌讀む吾なれば
歌の中なる舞子なつかし
花よりも美といふ北海道の此紅葉
如何で故郷の人に知らさん
美しき紅葉散り敷く山道を
吾が乗る馬の辿る淋しさ
月の洩る山小屋に寐し若人は
神無月の末雪を見しか
雨いつが雪となりけり北國の
深山の小屋の秋の夕くれ
紅の紅葉に雪のふりかゝる
こゝ北國の秋は淋しさ

熊笹の丈なす山に今日も又

野帳を持ちてわかうごは入る

雑吟

平田久良治

晴れし日の霜とぶ道にふみ迷ひなほかど遠き君を思いぬ。
冬の日のもれるをらの下を行く人あらはにも小さなるかな。
落葉たたく杜の煙の白くあがる中に悲しき落日を見る。
ひんがしの空美はしき曙に種々なるくもの流れ行くかな。
あきふかくこもれる寮の燈火を橋の上より見てすぎにけり。
病室の窓の障子に冬の日の濁れる色を悲しみて見る。
ふでとりて繪の具とくまに夕暮の雲變り行くふゆのそらかな。
京へ行くと笠かたむけし巡禮の眉にちりけり赤き柿の葉。

初冬雜詠

正風生

雪の日は友と炬燵に語りつゝ
遠き故郷を思ひけるかな
吹きすすぶこするの風も音たぬて
時雨るゝ夕べ山鳩のなく
ほのゝと明けゆく雪の空寒に

文苑

名知らぬ鳥のむれて飛ぶかな

雛僧の鐘樓のぼる夕暮を

十里の孤鳴雪にくれゆく

鳴きわたる雁の羽音に驚きて

目覺むる夜半の一人さむき

冬枯の町は淋しく黄昏れて

木枯さむく吹きすすむかな

水鳥や浮世を波にまかせつゝ

霜降る夜半を浮寝するなり

植の木に大根乾せし柚が家の

垣根に咲ける茶梅の花

雪の日九句

星波

粉雪や朝の峠路を荷馬行く
熊養るや爐の火を渡る雪嵐
著に談ず村塾の夜を吹雪哉
灯の里へいそぐ馬上の吹雪哉
湖畔冬木鳥居の見て露晴る
大杉に三ヶ月低し雪の原
冬晴るゝ沼べりの家や家鴨飼ふ
鶏園ふ小家や寒雪となる
山波海に落つるあたりや冬の月

雜報

學 校 記 事
校友會辯論會 十一月十八日午前九時辯

校友會便り

論會を開催し會員多數の出辯ありしが今回は招待員泉對西筑摩部長の理想主義と現實主義と題する大演説もありて盛會を極め午後一時過散會せり
○松原教師見送 長野警察署に轉任の松原擊劍教師は十一月廿日午前十一時出發に付職員生徒一同は福島停車場に見送をなせり
○校友會へ木杯下賜 校友會にては去る大正二年北海道外六縣凶作及び同三年鹿兒島縣櫻島爆發の際罹災窮民へ金拾五圓寄附せしが今回其賞として北海道廳長官より木杯一箇下賜せられたり
○校友會顧問更迭 今回左の通り校友會庶務會計顧問の更迭ありたり
依願校友會庶務會計顧問ノ囑託ヲ解ク
福 山 教 諭
校友會庶務會計顧問ヲ囑託ス
○校長出張 七宮校長は文部省に於ける全國農學校長會議列席の爲十一月廿六日出京十二月二日用務を了へて歸校せり
○發火演習 十二月十二日午前九時より全校生徒は福山教諭指揮の下に日義村及び福嶋町間に於て折しも降りしきたる雪霰の中に勇壯なる發火演習を舉行し午後二時半終了歸校せり

光なく色なく雲低き霜月十八日我校友會辯論部は講堂に於て開かれたるが十數名の辯士...

主義は現存の事實にして苟も相當の思慮あり目的ある以上人間の必ず保持する所のものにして吾人は只全理想主義か全現實主義か...

君も亦初陣の演壇也されど其沈着な態度壯快な辯舌共に君の未來を卜さしめるには充分であつた

- 川口勇二郎君 十二月一日一年志願兵として松本歩兵第五十聯隊第九中隊に入營せらる

- 金一圓 千村善三君 曲田秀二君 宮崎二郎君 輪湖正由君 武久貞一君 梨原貞次君 松館藤太郎君 澤柳壽夫君

- 特別寄附 田中吟重君 中村子之作君 右庭球部へ寄附 右雜誌部へ寄附

- 卒業生名簿 第一回 遠藤原作 齋藤正雄 岡戸廣治 高橋博 高橋作治 小瀧升太郎 中村豊治 原田義治 林哲治 坪倉藤三郎 森正次 祐川昌平 園原咲也 青戸爲九郎 原四郎 岡田恒治 大森久治 福田友次郎 福井利吉

廣告 拜啓多年擊劍教師として本會の爲盡瘁せられたる松原先生には今回長野警察署へ御轉任相成候に付ては多年の功勞に酬ゆる爲醜金贈呈致度候間御賛成被下度左記御承知の上御送金願上候

松原教師謝恩金領收報告 (第一回) 都竹武次郎君 古畑秋藏君 金五拾錢

林友代領收報告

加茂憲太郎君 一年志願兵として金澤野砲兵第九聯隊第六中隊へ入營せらる

愛媛縣通泉郡役所 本郡日義村 東京府下高田村大原一ノ六〇四 東筑摩郡片丘村 Navy Hotel No. 5-16 EIT Beach Road Singapore 本郡福嶋町 宮崎縣西諸加久藤小林區署 鳥取縣 第一回 川岸滋次郎 鷺澤忠治 武久貞一 宇佐美周紫 尾重清 木村鐵次郎 原忠治 南村末吉 林與五郎 温井誠一 鶴岡政義 中島源一郎 松本貢 黒岩正平 岩久宗治 乙谷耕吉 大脇又術

新潟縣 新潟縣立立嶺山事務所 茨城縣日立嶺山事務所 南安曇郡安曇村 靜岡縣安部郡役所 朝鮮平安北道江界郡高山鎮警林 本郡吉妻村 本郡駒ヶ根村 本郡支局飯田出張所 肥後縣鹿野郡多良木小林區 第二回 遠藤治一郎 倉澤真一 下條初太郎 加藤純一 烟澤卓二 柳澤邦信 松井定道 中澤龜吉 嶽野利雄 岡田彌兵衛 山下常記 柳澤熊治 鶴殿正雄 宮下信一 山下藤一 野知里慶助 代田善次郎 小林桂一郎 杉本純平 三宅寶洲 辻敬二 但馬廣造 小藤作四郎 前野慶三 古畑金三

本會支局野尻出張所 西筑摩郡日義小學校 同郡木祖村 石川縣珠洲郡役所 朝鮮平安北道林業部 岡山縣真庭郡富原村 石川縣河北郡金津谷村 同縣羽咋郡河合谷村 東筑摩郡片丘村 526 Cordova St. Vancouver B. O. Canada 本會支局野尻出張所 福嶋町 慶道院青森縣事務所 南佐久郡日田小林區署 埼玉縣勸業課 北安曇郡常盤村 群馬縣沼田小林區署 本會支局宮ノ越分擔區 本會支局野尻出張所 盛岡小林區署 下伊那會地村 西筑摩郡片丘村 福嶋町 愛知縣東加茂郡旭村牛地 第三回 嶽野利雄 岡田彌兵衛 山下常記 柳澤熊治 鶴殿正雄 宮下信一 山下藤一 野知里慶助 代田善次郎 小林桂一郎 杉本純平 三宅寶洲 辻敬二 但馬廣造 小藤作四郎 前野慶三 古畑金三 第四回 千村重喜 狩戶深一 寺島正治 宮森太一郎 宮田實 戶田積 宮崎清太郎 木下安太郎 大熊俊彦 西野入德 川崎本雄 宮崎次郎 吉田精一郎 廣瀬靜之進 深田貞次郎 矢島駒二 太田喜代松 和田宗吉 由尾忠輔 大島角藏 松館藤太郎 肥後金四郎 市川潔 水野忠一 永井順

青森東津輕郡内真部小林區 農工銀行福島支店 北佐久岩村田小林區署 福嶋町 本會支局玉瀧出張所 山梨縣恩賜財產管理課 福嶋町 小縣郡西内村役場 第五回 竹内房太郎 新井喜太郎 上條嘉一郎 木村音次郎 松島九平 中嶋昌利 肥田幸一郎 小林恭市 平田稻雄 宮城忠藏 瀨在實 仲俣伍市 松澤萬吉 北澤時三郎 金井澄水 上田新三 小池新伍 水橋要作 宮崎惠喜太 樋口勇 小山田喜十郎 北川信美 藤卷壽一 高野金作 高山治人 寺島俊一

本會支局玉瀧出張所 新木縣太田原小林區署 埴科郡森村 岐阜縣加茂郡川邊町帝林七宗出張所 小縣郡役所 本會支局 北佐久郡中佐都村 本縣小縣郡長村 福嶋縣福嶋小林區署 茨城縣日立嶺山事務所 秋田縣山本郡太具嶺山事務所 本會支局三股出張所 朝鮮總督府農商工部山林課 西筑摩大桑村 朝鮮新州營林廠自修會 千葉縣 秋田縣阿仁嶺山事務所 本會支局帝林玉瀧出張所 名古屋支局帝林付出張所 山梨縣恩賜財產管理課 西筑摩新開村 群馬縣 愛媛縣 茨城縣日立嶺山事務所 上水内郡役所 本會支局 奧原吉右衛門 林省三 竹內茂 千村善三 脇田義正 久保田傳一郎 池田藤三郎 一之瀬 製裘壽 原七郎 原喜四三 蜂須賀宮次郎 本多清右衛門 洞山鹿之助 岡戸郁二 若林遊龜雄 田中吟重 中嶋要人 中田辰雄 仲田惠介 向井辰次郎 野村光智 倉科浦一郎 山村次一 松澤莊太郎 芦澤庸三

本會支局十ノ原出張所 朝鮮江原道洪川郡林業技手 栃木縣尾島山上ノ手 山梨縣恩賜財產莊崎出張所 青森北津輕喜市小林區 本會支局野尻出張所 岐阜縣惠那郡役所 諏訪郡富見村森林測候所 岐阜縣第六課 本會支局福嶋出張所 山梨縣恩賜財產管理課 岐阜縣惠那郡福岡村 本會支局野尻出張所 茨城縣高萩小林區署 北海道廳林務課 本會支局妻籠出張所 靜岡縣盤田郡電山村西川分擔區 西筑摩郡大桑村 本會支局玉瀧出張所 本會支局野尻出張所 本會支局野尻出張所 靜岡縣藤原郡金谷町帝林分擔區 本會支局野尻出張所 南滿鐵道會社地方課 北佐久郡大井村 山梨縣恩賜財產管理課 藤澤出張所 市岡淳一郎 伊藤益雄 今井健次 長谷部兵次 原耕民 原久保作 志津忠治郎 遠山一衛 和田守衛 河島憲一 金田美行 甲田林 加藤清一 米山真次郎 高柴真次郎 中澤揚 松本清太 小池金三郎 小松六三郎 小林佐久馬 北村竹次郎

名古屋支局小坂帝林出張所
熊本縣地小坂林區署
岐阜縣本郡中牧村

第八回

神奈川縣足柄上郡農林學校
島野縣農林務課
福嶋縣猪苗代町川上保護區
松本小坂林區署
木曾支局野尻出張所
下伊那郡田町
小縣郡丸内町
木曾支局上松出張所
福嶋町
更級郡權崎村
岩手縣岩手郡淺岸村大志田
西筑摩三岳村
北安曇郡役所
青森縣大畑小坂林區署
木曾支局玉瀨出張所
青森增川小坂林區署
木曾支局殿原出張所
東筑摩宗賀村
香川縣伊多度郡七伯小坂林區署
木曾支局玉瀨出張所
山梨縣四八代郡役所
北佐久郡畑八村役場
埼玉縣北足立郡大和田町平
埼玉縣專門道場内

宮澤清輔
日野雅亮
森野亮
德武國久
服部啓次郎
藤田要吾
嶋田勘四郎
長谷川義雄
原井實太郎
倉澤健一
吉村金次郎
宮崎光智
小池一郎
西尾長一郎
篠原昇次
梨原貞次
塚本三郎
丸山金三郎
木村康明
市川左金吾
宮澤嘉一
岡西謙三
柏澤國治
鹽川金次
樋口智久

第九回

山形縣最上郡新庄小坂林區署
四築郡大桑村
北佐久郡岩村田町
本郡大桑村
木曾支局福嶋出張所
鳥取縣農林
鳥取縣農林
東筑摩郡日立嶺山事務所
茨城縣日立嶺山事務所
山梨縣日立嶺山事務所
北佐久郡岩村田町
東京大坂區署
岐阜縣帝林小坂出張所
埴科郡豐榮村
松本小坂林區署
山梨縣北郡留野役所
鳥取縣東伯郡山守小坂林區署
樺太太守王子製紙會社
青森川内小坂林區署
木曾支局玉瀨出張所

小林哲三
曲田秀三
土屋浩三
加藤正次
下村博
吉田佐十郎
征矢野余所夫
小羽根安治
木下稗藏
角田久福
吉澤英雄
石曾根四郎
村松一清
安藤次郎
前田正義
伊藤昇次
篠原爲一
伊藤德之丞
川合清行
長谷部眞一
田中榮一
久保田吾良
古畑七三
渡邊知則

成瀨義郎
坂田勘太郎
市川靜夫
關谷一夫
樋口德一
家高甚一
大久保五成
網江七兵衛
原貴平
小田洋一
岡田益善
大田盛一
神作四郎
唐澤清見
吉池三九郎
中嶋信敏
上田彌太郎
臼井辰雄
白井高就
野中政基
松島周一
喜多村明
代田文之助
下枝壽一
日野清亮
羽田龍尾

第十一回

北安曇郡中土村
福嶋縣相馬郡石神村研伐所
山梨縣恩賜財產管理課谷村出張所
千葉縣久留里小坂林區署
山形縣新庄小坂林區署
盛岡高等農林學校
北海道旭川局神樂町帝林上
川出張所
靜岡縣河津帝林出張所
神奈川縣大磯帝林出張所
岐阜縣付知帝林出張所
山形小坂林區署
山形縣小坂林區署
青森縣津輕郡中里小坂林區署
上伊那郡高遠町
青森縣津輕郡小坂林區署
青森縣津輕郡小坂林區署
廣嶋縣山形郡河内村
山梨縣恩賜財產管理課
靜岡市馬場町中澤幸由方
東京大坂區署
石川羽咋郡西增種村

齋藤海藏
二木季大
塚田大
澤柳壽夫
原村吉雄
千村吉高
赤羽新八
市岡新八
梅田吉郎
石坂季治
中垣英一
今井安男
關井安男
新田三男
山崎三男
柳澤義雄
久保照人
久保照六
佐藤光造
岩瀬幸吉
長谷川房藏
深見利一
伊藤正之助
池田仲治

第十回

朝鮮新義州營林廠自修會內
群馬縣高崎小坂林區署
南佐久田口村役場
岐阜縣小坂林出張所
西筑摩福嶋町
本郡讀書村
西筑摩新開村
廣嶋縣西條小坂林區署
南安曇郡明盛村
茨城縣久慈郡大子小坂林區署
西筑摩大桑村阿寺伐木所
北佐久小諸町
秋田縣太田小坂林區署
岐阜縣津輕郡上野明方村三
井林業部
北海道天鹽中川郡中川帝
林出張所
富山步兵第九聯隊第六中隊
西筑摩郡駒ヶ根村
岐阜縣付知帝林出張所
秋田北秋田郡長木村ニツヤ
保護區
松本市日の出町
木曾山林學校
南安曇郡鳴々官行事業所
南筑摩郡岳城産業試驗場
南筑摩郡上賣村長倉保護區
北海道旭川帝林上川出張所
更級郡桑原村

池野万次郎
飯沼要人
稻葉増吉
今井眞二
林勘次
早川一雄
三尾貫三
千村萬二
等々力官一
萩原惠治
加藤朝太郎
唐澤俊一夫
吉川眞夫
田近善右衛門
田中泰吉
種倉隨造
竹原久治
都竹武次郎
東原智
中村五郎
中田一穰
長崎千夫
野澤博
恩田司馬之助
大森悅
黑崎洋治
柳澤得衛

第十三回

青森縣土内郡小坂林區署
西筑摩福嶋町
西筑摩駒ヶ根村
青森縣中里支頭沓沓沓沓
寶農林部
群馬縣大間々小坂林區署
秋田縣能代小坂林區署
木曾福嶋興隆寺
高知縣安藝小坂林區署
千葉縣久留里小坂林區署
青森縣蟹田小坂林區署
秋田本莊小坂林區署
埼玉縣見玉郡長崎村
新潟北魚沼郡小出町小坂林區署
第二號保護區官舎
南佐久郡畑八村
長野縣農林務課
金澤野砲兵第九聯隊第六中隊
松本五十聯隊第九中隊
豊橋步兵六十聯隊第九中隊
木曾福嶋町
樺太廳林務課
愛知縣南設楽郡新城帝林出張所
豊橋工兵第十五大隊第二中隊
山梨縣恩賜財產管理課谷村
出張所
甲府市帝林出張所
三重縣龜山小坂林區署

柳澤止之進
安井嘉一
丸山久吉
松川三郎
松上敏男
松澤敏男
藤枝茂
小崎英一郎
小林英一
安藤英一
近藤幸吉
新井彌藏
宮澤功
水澤壯三
伊藤喜代
加茂憲太郎
川口勇次郎
下平三
百瀬三
原正造
竹村節三
千村彌之助
矢嶋武六
古畑秋藏
澤田富可

鳥取小林區署
南佐久北牧村役場
新潟北蒲原郡五十公野小林區署
高知縣馬路小林區署
南佐久白田小林區署
福島縣喜多方小林區署
長野小林區署
下伊那伊賀真村
熊本大林區署
北海道苫小牧帝林出張所
南安曇郡明盛村
岐阜縣小坂帝林出張所
北海道夕張帝林出張所
青森喜良市小林區署
四筑摩郡駒ヶ根村
長野小林區署
大坂大林區署
岐阜步兵第六十八聯隊第七中隊
石川金澤市大手町
栃木縣今市小林區署
熊本大林區署
朝鮮平安北道厚昌郡厚洲古邑
憲兵派遣所附
下伊那上郷村
大坂大林區署
福岡縣柳倉小林區署
群馬縣中之條小林區署

森次 熊谷 清逸
千田 政美
有賀 正一
中川 源太
平田 美則
丸山 嘉一
久保田 邦治
久村 利一
奧村 久雄
長谷部 久八
等々力 興弘
喜多村 弘
拓植 五郎
中畑 佐耕
村上 安太郎
合井 武雄
宮川 昌平
加藤 源一郎
開運 隆飛登
今井 武雄
梅村 計介
坂本 光太郎
佐々木 久一
宮下 孝美
岡西 猛
樋口 颯

杉縣新庄小林區署
栃木縣太田原小林區署
東京目黒林業試驗場
仙臺小林區署
四筑摩大桑村
上伊那河南村
樺太廳林務課
樺太大泊王子製紙會社
四筑摩新開村
福岡縣嘉穂郡稻築村
下伊那和田村

市岡 正茂
小原 靜雄
大澤 國男
山崎 兵平
小池 茂樹
小松 良輔
野本 與一
森下 義郎
平田 實
福澤 定雄
鳴澤 義雄

大正五年十二月廿三日印刷
大正五年十二月廿五日發行
長野縣四筑摩郡福島町四〇四番地
編纂發行人 安井正夫
印刷者 田中彌助
印刷所 長野市四後町乙二十一番地
發行所 長野新聞社活版部
長野縣四筑摩郡福島町二八九番地
書店